



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 85
Issue Date	1935-07-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77674
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part22.pdf





芒亭書屋談叢

もう田植系が始まつて居る。初夏のよき眺めの一つだと都會の人達は云ふ。だが、此頃よく見る事であるが、老人が唯一人でしょんぼりと田植系して居る景色は、繪にはなるかも知れぬが、どうも悲惨に見える。細煙や田神あたりを電車を通る時そんな場面を私は二三度見た事がある。

田植歌に興じつゝ妙にエキサイトした若い人達が賑やかにやつた田植系はもう此邊では見られない。シヤムの田植系の寫眞を見た事があるが、大勢の男女で如何にも楽しさうである。朝鮮南部では田の草取りの時に部落の人達が樂隊入りで協働してやるさうである。收穫の後でツレナルとて村の大祭がある。日本の各地に今でも少しは残つて居る「ゆひ」と云ふのによく似た一種の勞働交換であるが、美はしい近隣のよしみも現はれて居る。少くとも勞働が娛樂を伴つて居る。

昔農事は神事と深い關係を持つて居た。我が國の神事の如何に多くが農事と關係して居る事か。此傾向は農業國にはどこでも大抵見られるのであるが、農業を宗教に最も結びつけて居るのは、古代ベルシャのゾロアスタ教であらう。そこでは農業勞働其ものが神に對する最高の奉任とされて居た。

農事より娛樂を除去し信仰を除去して殘るところは何であるか、さうだ、無駄のない生産。だが苦痛と不平と不安とが常にそこには伴つて居るであらう。

正條植系が初まつて以來田植系の行事がさびれたと云はれて居る。多收穫や品種改良の合理的方法を科學は色々と農村に教へて來た。かくて科學が農村へ與へたものは決して少くはないだが、其際思ひがけなくも農村より奪ひ去つたものの失はしめたものゝ如何に大きい事であらうか。